



復興支援活動の事例 商店街・個人商店・事業所の取り組み



(株) 赤井沢

いざという時のために、物も心も備える。
いつも“心のおまけ”を発信したい。

当たり前前に助け合うことの大切さ。
非常時にこそ必要とされるものがある。

震災直後は社員たちをすぐに帰宅させ、次の日は被害の少なかった社員が出勤してくれて、後片付けに追われました。創業家は本社建物に隣接しており、祖父の代から“米と味噌、炭、水は絶えず確保しておくように”と言い伝えられ、これらを忠実に守って備蓄していました。おかげでガスも電気も止まった中で、七輪がありましたのでご飯を炊いて社員に分けることができたのです。困っている方には米や醤油などを差し上げたりし、昔からの教えがこういう風に役立つとは思いませんでした。翌3月12日には店を開け、割れたガラスの代替や応急補修にと段ボールやガムテープ、乾電池などを求めにいられた多数のお客さまのご要望に応えることができました。こうして市内6店舗は社員の頑張りのもあり、全店とも3日後には開店にこぎ着けることができました。

開いている店がほとんどがなかった震災直後に、車で石巻からやって来たというご高齢のお父さまと息さんが本店が開いているのを見つけて入ってこられました。着の身着のまま避難してこられたらしく、肌着や防寒料が欲しいとのことでしたが、文具店である当店にはあるはずもありません。「ここで2時間待っていてくださ

頼りにされるから、何とかしたい。
信頼関係がつかない文具のギフト。

4月の新学期の前に、私は聖和学園の同窓会長を務めている関係で、被災した生徒に文具をプレゼントする準備していました。すると、同校卒業生である14名の社員から「自分たちも何か手助けがしたい」という申し出がありました。会社からの支援とは別にお金を出し合い、自分たちの発案で学用品のギフトを人数分作り、お渡しできました。被災した学生さんたちにも、社員の気持ちが届いて、少しでも前向きな気持ちで勉強に励んでいただけたらと思います。また、文具組合を通じて、支援団体に義援金50万円を寄付させていただきました。

その後、被害が大きかった雄勝町の子どもたちに文具ギフトを贈りたいと、上杉の教会から依頼がありました。小学生用60個、中学生用80個という大口の注文でした。当時は物流網がまだ十分では

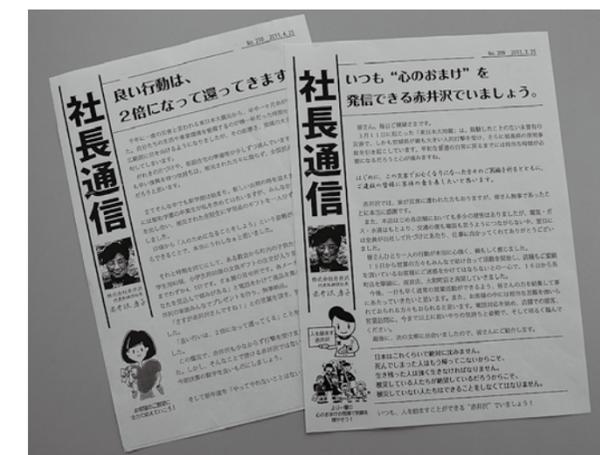


▲赤井沢長町本店外観



▲代表取締役副会長の赤井澤 孝子さん

い」とお願いして、卸町の衣料業の知り合いのもとで何とか衣料品を工面し、自宅にあったタオルや毛布と一緒に差し上げました。店を開けておくだけでも、役に立てるきっかけをいただけるのだと思いました。



▲2011年3月・4月の社長通信

なく、東京のメーカーなどからの仕入れはスムーズではなかったのです。しかし雄勝町へギフトを届ける教会の出発日は4日後に迫っていました。私は各メーカーの営業マンに「あなたを男と見込んで頼みがある」と電話をかけては商品を集めました。社員と家族総出でプレゼント用にラッピングし、出発日の10時の時間ぎりぎりに納品することができました。

日頃から「人のためになることをしよう」「人を励ますことができるようにしよう」という姿勢で仕事に向かっています。ただ、仕事をこなすだけでなく、相手が嬉しくなるような“心のおまけ”をいつも発信できる赤井沢でいたいと、気持ちを新たに引き締めた出来事でした。
(代表取締役副会長 赤井澤 孝子さん談)

(株) 赤井沢

所在地 〒982-0011 仙台市太白区長町5-3-3
TEL 022-249-2121 FAX 022-249-2128
URL <http://www.akaizawa.co.jp>
事業内容 オフィス・オートメーション機器およびソフトウェア、文具・事務用品、オフィス用品の販売
創業年 1921(大正10)年 代表者 赤井澤 太美造
従業員 60名



アフリーク・ソレイユ

被災地に仕事を生み出していく就労支援。
フェアトレードの理念が継続的な活動を支える。

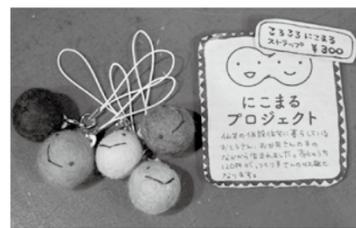
正当な労働対価で公正なビジネス。
小さな国々とつながる国際協力を通じて。

私たちは、アジアや南米など、主に開発途上国の民族雑貨を現地
で買い付けたり輸入するなどして、小さな店で販売しています。
一般的にインド製や中国製のアクセサリ類で、品質の良い製品が
特に安く販売されている場合には、不当な児童労働による製品の可
能性があります。どの国でどんな人が、どのくらいの報酬で作っ
ているのか、それが生活していける水準なのか。フェアトレードは、作
る人と買う人が対等に向き合い、互いに利益を生みながら、特に弱
い立場の生産者の利益を尊重しようというビジネスです。

そんな精神を基本とする東京のフェアトレード関連のNPO団体
を通じて、3月下旬に全国の取引仲間からフェアトレード製品が届
きました。震災で大変な被害をこうむっている仙台や宮城の被災者
の役に立てて欲しいと、チョコレートやジュース、紅茶、ココア、コー
ヒーなどが集まったのです。それを被災地に送ろうと思っていたと
ころ、ボランティアで避難所に行った店のスタッフが「支援物資は

同じ物が一定数揃わないと、配布されにくく山積みそのままだった」
というのです。仮設住宅などでは、支援内容にばらつきが出ないよ
うに配慮する必要があるのでしょうか。それなら、物資として送ら
ずにチャリティー販売し、寄付金にして日本赤十字社に募金しよう
と思い、店内に募金箱を設けて販売を始めました。

店のお客さんたちはとても協力的で、チャリティー販売は順調で
した。



▲にこまるストラップ



▲にこまるクッキー

被災地とつながる“国内版フェアトレード”。
仕事だけでなくコミュニケーションの場も提供。

1カ月が経ち、売り上げた約3万円を日本赤十字社に寄付しよう
としました。しかし、寄付すればそこで支援は終わってしまいます。
これから大切になってくることは、今日や明日の食べ物ではなく、
家も仕事も失った方たちに何か仕事をつくり出すことではないか
など。私たちは約3万円の小さな善意の塊を、どうしたら継続的な支
援につながれるかを考え続けていました。

そんな時、テレビで女性料理研究家(チームむかご)の活動が紹
介されているのが目にとまりました。それは、被災地で専門家のレ
シピによるクッキー作りをしてもらい、これを支援したい全国の方
が仕入れて販売し、その利益をクッキーの作り手の賃金にしよう
というものでした。クッキーは多賀城や仙台、会津若松などで現在も
作られており、私たちは善意の約3万円を元手に、仕入れる際の送料
だけを手数料としていただき、売り上げ代金でまたクッキーを仕入
れることにしたのです。

2011年の秋から取り組んだこの支援は、現在ではクッキーだけ

でなく、ふわふわのフェルトボールの付いたストラップの販売にも
拡大し、店頭を賑わせています。

被災地のみなさんには、仕事として収入を得るだけでなく、作業の
ために手を動かしたり、集まっておしゃべりをしたりすることで、
少しでも元気になっていただけることを願っています。そして今後
はチャリティーや寄付を通じてではなく、ビジネスとして対等なお
付き合いをさせていただくことが、何より復興につながるのでは
ないかと思えます。小さな店が持続可能な形でできる支援をこれか
らも続けていきたいですね。(専務 野口 真由美さん談)

支援連携先

- チームむかご
農業支援や被災地支援等の活動をする一般社団法人 <http://mukago.jp/>



アフリーク・ソレイユ

所在地 〒980-0811 仙台市青葉区一番町2-5-6
TEL 022-267-0104
事業内容 民族雑貨輸入販売
創業年 1998(平成10)年
代表者 野口 孝一 従業員 5名

石澤塗工店

仙台筆筒づくりは一時休業状態。
地域のための消防団活動をやり遂げる。

連坊分団の使命感。
着替えに一時帰宅、すぐまた出勤。

私は父(實)と二人で家業である仙台筆筒づくりの作業の最中に被
災しました。電気、ガスは止まりましたが、水道が断水することはあ
りませんでした。自宅建物と家族の安全を確認すると、若林消防団連
坊分団員である私は、詰所のある連坊コミュニティセンターに駆け
付けました。震度5弱以上の場合は、自動的に出勤命令が下される規
定でしたので、迷うことなく行動に移ることができました。他の24名
の消防団員も次々に駆けつけ、分担して管内の見回りとお年寄りの
避難誘導を始め、避難所にも水を配るなどしました。

翌12日は、早朝から荒浜小学校方面での人命救助の要請があり、
連坊分団から私を含め4~5名が出発。がれきをかき分けて向かっ
た場所には、子どもを含めた生存者3~4名が毛布をかぶり一塊になっ
ていました。到着を待ちわびていて大変に感謝されましたが、寒さ
と疲れで話しかけても一言も返せない状態のお年寄りもいました。
上空にはヘリコプターが何機も旋回しているのが見えたので、私
たちは被災者を吊り上げてもらう準備作業にかかりました。その後無
事、一人ずつヘリコプターに乗せられ、救助されて行きました。

こうして2~3日間は救出活動が続き、以降は遺体の収容に追わ

仕事が途絶えた間、分団活動に集中。
地域と暮らしの役に立ちたい。

連坊分団の隊員たちは、その後も震災発生時から6月上旬まで、毎
日朝から夕方までほぼ一日中、津波被害を受けた沿岸部捜索活動を
行いました。

そんな状況でしたので、3月11日から5月下旬まで家業の筆筒づ
くりには、まったく手をつけられませんでした。しかし頭の隅では、
これからの仕事や生活のことが片時も離れることはありませんで
した。震災直後から仕事の受注もまったく途絶えてしまっており、
父も大変心配して転業も考えたほどです。しかし、家と命が残った
のだからよしとしようと思い直すことにしました。

不安を抱えながら6月を迎えると、途切れていた仕事が徐々に回
復してきたのです。仙台筆筒の修復の依頼が次第に舞い込むよう
になってきたのです。先祖代々使いこみ、長年家族の歴史と共に家に

れました。津波を被った地域だけに、100m進むのがれきの山を
かき分けながら2~3時間を要したほどです。

連坊分団員は震災の発生したその日から2週間、全員が詰所に泊
まり込んだまま、自宅にも戻らず活動し続けました。その間、家族と
の連絡もとれず、だいぶ心配をかけたようでしたが消防団員として
の使命は果たすことができたと思います。



▲店内の仙台筆筒

置いてきた、愛着のある筆筒をまた直して使いたいというお気持ち
になったのでしょうか。職人冥利に尽きる、ありがたいことです。

火消しの仕事も江戸時代から続く役回りですが、仙台筆筒も伝統
に支えられて今日まである仕事です。人の暮らしに長く息づくもの
に縁がある我が家としては、これからもここ連坊で、人とのご縁同様、
仙台筆筒づくりの伝統を大事にしていかなければとあらためて感
じるようになりました。

(店主 石澤 實さん、石澤 和夫さん談)

支援連携先

- 若林消防団連坊分団
仙台市若林区連坊地区の消防活動や非常災害等に対処する消防団



石澤塗工店

所在地 〒984-0052 仙台市若林区連坊2-1-40
TEL・FAX 022-256-6398
事業内容 和洋家具製造、漆塗
創業年 1927(昭和2)年
代表者 石澤 實
従業員 2名

(株)今庄青果

生産者と消費者をつなぐ朝市らしい活動。
八百屋の支援でパワーアップしたボランティアたち。

明日のことは分からない、だからこそ助け合おう。
朝市だから何とかしてくれるという期待を受け。

夕方に向けて朝市が買物客で混雑し始めていた時に起きたその揺れは、めまいかと思ったほど激しいものでした。1978年の宮城県沖地震が頭をかすめ、上から落ちるガラスや物を避けようと、平地の駐車場にお客さまたちを避難誘導しました。暗くなる前に六郷の自宅の様子を見に行ったときには、津波の第2波、第3波が押し寄せ、水かさが増していくのがわかりました。家には入れず、かろうじて自家発電装置のあった今泉インターチェンジの建物を見つけると、すでに多数の方たちが避難していて、そこで1晩過ごすことになりました。震災の翌日、朝市の店舗では仕入れが完全にストップ。店は開けましたが前日の残りの品物はすぐに売り切れ。あるお客さまから「明日は開けてくれるの?」と困った顔で聞かれ、思わず「何とかするよ!」と答えていました。果たせるかどうか分からない小さな約束のその言葉が、結局、私を動かす力になったのです。

仙台中央卸売市場には、市場から出発しても行き場をなくしたトラック

失われた畑を取り戻す活動に心を打たれた。
農家を支援するのは八百屋の役目。

私どもの店には常時、イベントに使う鍋やプロパンガス、味噌などが準備してあり、緊急時の炊き出し用としての備えでもありました。まず朝市で100食分の味噌汁を提供しました。そうするうちに知り合いから、支援物資の行き届かない地域で炊き出しをしたいという大学のボランティアサークル「HARU」の情報が寄せられました。炊き出しの経験がないという彼らにそのノウハウを提供し、野菜などの物資を支援すると、気仙沼に向かって出発して行きました。さらに大学生中心の支援グループ「ReRoots」も出会いました。津波で塩をかぶった若林区沿岸部の畑に再び豊かな土を取り戻そうという、気が遠くなるような取り組みを行っていたのです。がれきにまみれた畑の土を、農家のおばあさんが鍬1本で掘り起こしている姿を見て彼らは立ち上がったと聞いて、私もできる限りの支援を続けることにしました。塩と砂で固くなった土を両手で揉みほぐし、ふるいにかけて、雑草も抜くという大学生の数は、次第に増えていきました。延べにして2000人以上が全国から集まり、最終的に100軒以上の農家の土を以前と同じような畑の状態に戻すことができたのです。

やがてその畑から作物が収穫できるようになりました。私は学生たちに「取

が引き返して来ました。日にちが経つほど、通行止に遭っていた多くのトラックが次々に動き出し、品物が集まり始めたのです。次の日、朝市では3~4軒が開店。3月14日には、店舗に泊まり込んで市場に通っていた私たちを含め、約4割の店主が朝市に戻ってきました。市内にはまだ十分な食料品がない時期で、お客さまは朝市ならきっと食料品があるだろうと集まり、シャッターを開けると長蛇の列ができていました。これだけの期待を目の当たりにして、いつも通りの八百屋の仕事こそが、なによりの支援ではないのかという思いを強くしたのです。



▲支援グループ「ReRoots」

穫できたものを売ってはじめて農家の支援になる」と話し、私どもの朝市の店舗の一角を販売場所として提供することにしました。彼らは2012年11月に「りるまあと」をオープンさせ、毎週土曜日に野菜を売り、その売り上げを被災した農家に還元しています。

朝市の八百屋がやるべきことは、いざという時に役立つ仕事のやり方をいつも続けるということ。そして特別なことではなく、普通のことをいつでもできるようにすることが大切だと、今回の震災を通じてあらためて実感しました。

(代表取締役専務 庄子 泰浩さん談)

支援連携先

- ボランティアサークル「HARU」
東北大学の現役学生・教職員の有志で、復興を支援するボランティア団体
<http://www.harutohoku.org/>
- 支援グループ「ReRoots」
津波被災地の復旧から復興、更には地域おこしにむけて活動する一般社団法人
<http://rereoots.nomaki.jp/index.html>



(株)今庄青果

所在地 〒980-0021 仙台市青葉区中央3-8-8 第2カネビル1階
TEL 022-227-9547 FAX 022-227-9566
E-mail rjfm955@ybb.ne.jp
事業内容 高級青果物、一般青果物、輸入青果物、お見舞い用フルーツが盛り合わせ、病院・学校・業務用食材などの販売
創業年 1991(平成3)年 代表者 庄子 泰雄 従業員 29名



▲代表取締役専務の庄子泰浩さん

SMBCコンシューマーファイナンス(株) プロミス仙台お客様サービスプラザ

早い時期の会社の決断で支援活動を開始。
新しいつながりと連帯感が社内に生まれる。

いままでにないお客さま対応に苦慮。
生活面でのアドバイスなど親身の相談。

激しい揺れで店舗の壁にひびが入り、ビルの窓ガラスが割れて破片が落ちてきました。店舗の安全が確保されるまでの間、休業を余儀なくされ3月25日ようやく営業を再開することができました。

震災直後から、いままでとは違うお客さま対応が求められ、どうすべきか悩みました。まず、お客さまが現在どういう状況なのかを確認することから始めました。震災前から業務として、お客さまの家計管理などのコンサルティングを行っていましたが、今回の震災でさらに、今後の生活に関する詳しいアドバイスやフォローが必要となりました。具体的には、返済に関わることだけでなく、心のケアや生活のことを中心に相談することにしました。これについては、いまでもお客さまから生活を第一に考えることができて助かったと感謝されています。

業務での支援策としては、被災された方へ向けての「応援融資」(平成24年12月31日終了)、「特定緊急貸付」(平成24年12月31日終了)、

さらに返済支援として「返済期日延長」、「元金・利息の減免制度」、「利息の引下げ」、「ATM利用手数料無料化」などのサービスを提供しました。



▲ボランティア活動中

本業のスキルを活かして
ボランティアセンターのスタッフとして全国から参加。

会社全体として義援金1千万円を仙台市に寄付することが決まり、3月中に本社より仙台市に寄付をさせていただきました。物資の支援としては、仙台北部・南部津波災害ボランティアセンターなどにカロリーメイト1万個以上、宮城県災害対策本部へ水、軍手、マスク、消毒液など、さらに岩手県宮古市の災害ボランティアセンターに土のう袋補助器具や休憩用ベンチ、パラソルなどを寄贈しました。

一方で、全国21カ所(現在18カ所)にある弊社のプラザで手を挙げたボランティア希望の社員46名は、仙台市社会福祉協議会と連携し、ボランティアセンターが閉鎖されるまでの4カ月間にわたり、交代で懸命に活動に取り組みました。私たちは仕事柄、さまざまな電話を受けることがありますので、電話対応を依頼されました。仙台北部・南部津波災害ボランティアセンターでは、ボランティアを要請する被災者と活動するボランティアのマッチングを行いました。日常業務で培った自分たちの対応スキルが活き、そしてそれを評価していただき大変誇らしく思えました。

今回のボランティア活動を通じて、社員たちはいままで知らなかった人たちの動き、行政や地域の仕組みなどを実際に見て知って、視野が広がり、見方や考え方が変わったことでしょう。早くからボランティア活動をする意志を示した会社と、それに応えてくれた社員の心意気が頼もしく映り、胸が熱くなる思いでした。

(仙台プラザ長 渡邊 智法さん、渡邊 恵美子さん談)

支援連携先

- 仙台市社会福祉協議会
ボランティアや市民活動などの福祉増進活動をする組織
- 津波災害ボランティアセンター
仙台市に2箇所(北部・南部)ある津波被害地域での支援活動を集中的にサポートする拠点。現在は「復興支援「E-GAO(笑顔)せんだい」サポートステーション」に移行
- 岩手県宮古市の災害ボランティアセンター
岩手県宮古市の社会福祉協議会内に設けられたボランティア活動の拠点



SMBCコンシューマーファイナンス(株) プロミス仙台お客様サービスプラザ

所在地 〒980-0021 仙台市青葉区中央3-6-7 東日本建物仙台駅前ビル1・2階
TEL 022-268-6444 FAX 022-268-6442
事業内容 消費者金融業 創業年 1962(昭和37)年
代表者 幸野 良治 従業員 1867名

(株)エンタツ

**1日も早く通常営業することが復興の第1歩。
帰宅困難者対策や防災訓練への取り組みが課題。**

**電動のものはすべて止まったまま。
防火シャッターを手回しで開ける。**

本社から仕事で長町に向かう途中に地震が発生しました。すぐに渋滞が始まり、1時間ほど掛かって本社に戻りましたが、そのとき本社がある駐車場ビルの塔屋が大きく傾いているのを見て、被害の大きさを実感しました。

お客さまと従業員の安全を確認後、すぐに建物の被害状況を見て回ると、立体駐車場内の防火シャッターが地震の影響で閉じたまま開かなくなっていたのです。しかも、駐車場を利用していたお客さまは、一刻も早く車での移動を希望していました。何とか手で防火シャッターを開ける以外、ほかに手だてはありませんでした。防火シャッターは全部で6カ所。従業員と共に1カ所ずつ、手回しのハンドルで懸命に開け続け、全部開けたときは2時間が経過していました。

屋外には帰宅困難者と思われる人たちが大勢見受けられました。塔屋が落下してくるのではという恐怖の中、建物が安全なのかどうか、まったく判断できなかつたため、一時的な避難場所としてのビルの開放は断念せざるを得ませんでした。通行人の方々から要望が多かったので、トイレだけは開放しましたが、従業員も含めて外で

**中心部の早い復旧により炊き出し。
ボランティア活動に柔軟に取り組める組織へ。**

フランチャイズ店舗として経営しているプロント青葉店は、設備や商品にある程度の被害はありましたが、お客さまも従業員も全員無事でした。2日後の3月13日になると、プロントコーポレーションから無償でスープ300食、缶コーヒー2000本が届きました。この日、夕方には電気と水道が復旧。通勤もままならない中、自主的に集まったスタッフたちと次の日から炊き出しを行うことを決断しました。スタッフ5名たちと午前10時から炊き出しを開始し、温かいスープなどの提供に行列ができました。被災者でもあるスタッフたちの心意気や笑顔での応対が、本当に心強く頼もしく思えました。店には大量にパスタの在庫がありましたので、通常通りの営業を再開させていただきました。

青葉区錦町にある系列店“酒の穴 鳥心”では、宮城県の地酒や食

の待機となりました。

また、当社は防火対策として年に一度、ロールプレイング実習を行っていましたが、実際の震災時には想定外のことが多く、訓練通りには行かなかったことが残念です。



▲プロント仙台青葉通店での炊き出しの様子

▲炊き出しに並びお客さま

材をはじめ、東北の産品を積極的に使用した郷土料理など、復興メニューを提供しています。全国からのボランティアのみなさんや、復興関連の仕事で仙台を訪れた方が多く来店されますので、東北復興のためにも地元のおいしい物を召し上がっていただけるよう努力していくつもりです。

震災から3年経って悔やまれるのは、各地から集まった方々が、沿岸部でボランティア活動を行っているのを横目に、会社として何も支援することが出来なかったことです。今後、災害発生時には、従業員のボランティア志願などに対し、柔軟な対応ができる会社作りをしていきたいと考えています。(代表取締役 横山 一作さん談)



(株)エンタツ

所在地 〒980-0021 仙台市青葉区中央3丁目7番1号
TEL 022-224-8777 FAX 022-223-5369
E-mail issaku.y@entatsu.co.jp
事業内容 駐車場経営、不動産業、飲食店 創業年 1979(昭和54)年
代表者 横山 一作 従業員 100人以上



▲エンタツビル外観

柿沼米穀店

**震災直後から消防団で広報活動。
米は持ち歩ける重さに小分けし販売を工夫。**



▲店主の柿沼恭広さん

**消防団の管轄の被災状況を自転車で確認。
泊まり込みで待機後、荒浜方面へ捜索活動。**

ありがたいことに震災による店舗の被害は思いのほか小さくて済みました。建物は鉄骨造で意外と丈夫で、店内の低温貯蔵庫が揺れで移動した程度で、営業に差し障りはありませんでした。店の目の前の、JR東北本線の線路上に列車がいつまでも止まっている光景や、新幹線が広瀬橋鉄橋の上で停止している光景が今でも目に焼きついています。

私は消防署の太白区長町分団に所属しており、家族の安否確認の後、長町駅前商店街エリアの様子を自転車で見て回り、仙台南高校近くの詰所に向かいました。その後すぐに、すでに到着していた数名とポンプ車で巡回に出て、段差ができた道路の確認やガス漏れの注意などを呼びかける広報活動を行いました。途中でたまたま長町出張所消防署員の巡回車に出会い、“避難指令が出るので規定の避難所に移動してください”と広報するようにとの指示を受けました。それから広瀬橋周辺から長町駅周辺地域まで全域に広報し、3月11日の夜から13日まで詰所に泊まり込みで待機となりました。その間、ばやの処理や崩れた塀の片付けなどを行ったり、団員のうち数名が荒浜方面の捜索活動に出向いていたり、休

む間もない日々でした。

その後3月末まで詰所に毎日出勤しながら待機。配備態勢が敷かれ、捜索活動の指定日には太白区分団総勢30名、うち長町分団からは6名の出動要請があり、私も参加することになりました。津波の被害を直接受けた地区だけに、想像を超えた惨状を目の当たりにし、言葉がありませんでした。捜索が終了して数日後、消防署から依頼された健康チェックとメンタルチェックの自己申告を行いました。こうしたチェックが行われるほど、消防団員にとっても、体力的にも精神的にも過酷な現場だったのです。



▲柿沼米穀店外観

**白米を1kgから3kgまで小袋で販売。
家族はボランティア活動で避難所に通う日々。**

震災直後は、米を求めるお客さんが詰めかけ、5キロ詰の袋を買って行かれました。しかし、ガソリン不足で車は使えず、交通機関も滞っているので、みなさん手に持って帰る方が多く、これでは重くて不便だろうと1kg、2kg、3kgと小分けにして販売することにしました。数日後には電気が復旧したので朝から精米して、小袋に分けて、店頭で並べました。この方がより多くの方々に買っていただけたのです。また、石巻などの被災地に米を持って行こうとする方々にも多数立ち寄りいただきました。

時期を同じくして、家族はボランティア活動に取り組んでいました。父(敏万)は、避難所となった長町小学校と長町南小学校に出向き、救援物資の仕分けをしたり、避難者の要望などの調整役を買って出ました。実弟(圭三)も、長町南小学校で運搬のボランティア活動に

取り組んでいました。

消防団活動と地域のボランティア活動、そして米と灯油の販売など、非常時においてもそれぞれが自分のできることを、当たり前に取り組むことができました。地元で長く米屋を営み、地域や人と深くつながっているからこそ自然に体が動いたのだと思います。家族のそれぞれが自分のできることを進んでできたのは、我が家の誇りでもあります。(店主 柿沼 恭広さん談)

支援連携先

●太白区長町分団
仙台市太白区長町地区等の消防活動や非常災害等に対処する消防団



柿沼米穀店

所在地 〒982-0011 仙台市太白区長町6-8-37
TEL 022-248-0906 FAX 022-248-8121
事業内容 米穀販売、燃料販売 創業年 1919(大正8)年
代表者 柿沼 恭広 従業員 7名

(株)鐘崎

震災直後、かまぼこを避難所へ。非常食は近隣の方へ。
こどもの日には、「笹かま館」で復興支援イベントを開催。

津波は本社の500m先まで迫っていた。
直後から周辺の避難所にかまぼこを届ける。

震災時は、若林区鶴代の本社・工場におりました。揺れが続いている間は動くことができず、机の下に隠れるなど待機をしていました。揺れが収まってから、ようやく建物の外に避難することができました。1時間ほど屋外におりましたが、この時点で津波の情報はまだ確認できていませんでした。本社・工場のわずか500m先のところまで津波が押し寄せていたことを知ったのはしばらく経ってからで、本当に驚きました。

震災による弊社の被害は甚大で、工場設備は大きな被害を受け、松島と塩釜、多賀城にあった店舗も流失しました。被災後は、幹部社員が会社バスに泊り込み、従業員の安否確認をはじめ復旧作業の準備や手配に奔走しました。5日後には、工場設備などの復旧作業を始めることができました。従業員の安否確認には1週間ほどかかりました。中には自宅の被害が大きく家に帰れない社員や交通手段がなく帰宅できなくなった社員もいて、会社に泊まらざるをえない状況でした。全員が落ち着いて勤務できるようになったのは、約1カ月後のことでした。

震災直後は、本社の近隣の方々や店舗にご来店くださったお客さまに、かまぼこをご提供させていただきました。本社周辺に避難所が多いことがわかってからは、私たちが避難所に直接かまぼこを

地域への感謝を込めて営業を再開。
今もなお、復興支援活動を継続中。

営業を再開できたのは、3月28日。復活の第一歩として、1000枚を焼き上げました。仙台名産のかまぼこが今日あるのは、地域の方々に支えていただいたおかげです。お世話になった方々への感謝の気持ちを込めて、800枚は近隣の避難所にお届けし、残りの200枚は社長が陣頭指揮を執り、仙台一番町店で販売させていただきました。

営業再開後は、さまざまな復興支援活動も行いました。まず5月5日のこどもの日には、被災した子どもたちを元気づけようとイベントを開催しました。会場は、工場見学やかまぼこの手作り体験ができる弊社の体験型施設「笹かま館」です。近隣6カ所の避難所の子

届けすることにしました。若林体育館、六郷と七郷の各小・中学校など6カ所ほどにうかがい、かまぼこを配布させていただきました。会社に残っていた社員全員で手分けして配布し終えたとき、達成感が胸がいっぱいになったことを覚えています。



復興支援イベントでの子どもたちの様子



営業再開の様子



荒浜の海岸清掃



復興支援イベントのお知らせチラシ

きました。さらに会場の一角には、社員らが持ち寄った日用品などをフリーマーケットのように並べて提供させていただきました。このほか、沿岸地域の海岸清掃に自主的に参加した社員らもおり、浜辺でかまぼこを焼いて参加した皆さまに振る舞ったりもしました。こうした復興支援活動は、現在も続いています。

(取締役営業本部長 嘉藤 明美さん談)

菅公学生服(株) 仙台営業所

いつものように学校へ通うために。
被災した子どもたちに新しい制服を提供。

お世話になった地域へ役立つものを。
避難所で困っているみなさんに届けたい。

震災により、営業所の建物や倉庫は大きな被害を受けました。3月のことでしたので、納品を間近に控えた制服などの在庫が倉庫に大量にある時期でした。それが突然の地震による停電で、倉庫の搬入口の電動シャッターが開いたまま止まってしまったのです。商品の安全管理のため社員一人は私と共にやむなく会社に残ってもらい、他の社員は家族の安否確認のためにも一旦帰宅することになりました。

3月といえば、中学校や高校の制服を扱う会社では一年で最も忙しい時期です。私たちと取引のある中学校には8~9割が納品済みでしたが、高校ではこれから採寸に入ろうという時期でした。

しかし甚大な津波被害を受けた沿岸部には、制服でお世話になっている学校が50校以上あり、学区内のお宅はかなりの数が制服もろとも流されていました。私自身も被災して、家族とは1週間経ってやっと会うことができたので、被害にあった方々の気持ちは痛いほどよくわかり、会社としても個人としても何かできることで役に立ちたいという思いは強くなりました。3月下旬に県庁に赴き、学校の制服で困っている親御さんの支援をしたい旨を相談しましたが、寄付金にしても物資にしても、支援対象を特定するのは難しいとのことでした。それならばと、当社にはデザイン変更により、学校で使え

すべてを失った子どもたちのために。
制服メーカーとしてできること。

制服というものは、子どもにとっても親御さんにとっても大切な思い出となるものです。この仕事をさせていただいているからには、購入済みの制服を津波で流されて困っている方を、会社として何とか支援したいと思い、取引先の学校に向かいました。気仙沼や南三陸、石巻地区など、取引先の各中学校・高校で校長先生の承認を得た被災者に対し、無償で制服を提供させていただくことになりました。これには、実際に配っていただく地区の小売店の協力も不可欠でした。小売りを担当していた町の呉服店などでは、流された店舗もあり、そのような小売店への配慮と調整も大変に行いました。特に気仙沼向洋高校の被害は甚大で、私も被災した生徒の採寸をしたので

なくなった旧型の体操着上下の在庫があり、これらを提供しようということになったのです。学校のマークやプリント入りでしたが、寒い時期の避難所生活に使っていただければと、段ボールに入れた数百着ものジャージを避難所に配って回りました。



社内に展示しているミニチュアの学生服

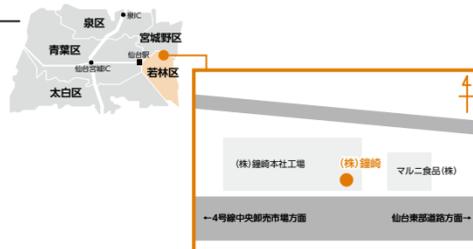
ですが、その時の生徒たちの姿を今でも鮮明に覚えています。自宅を失い転校を余儀なくされた世帯も多く、他校へ転校する場合も、制服は新しく購入する必要があります。そのような事情のある生徒さんにも、校長先生を通じて転校先の制服と体操着を提供させていただきました。

私たちは、震災後の困難な状況の下で支援活動を行う中で子どもたちの笑顔を見ることで勇気づけられることも多く、制服・体操着のメーカーとして役に立つ支援ができたことを大変誇らしく思っております。

(仙台営業所長 岸柳 正樹さん談)

(株)鐘崎

所在地 〒984-0001 仙台市若林区鶴代町6番65号
TEL 022-231-5141 FAX 022-231-2897
URL <http://www.kanezaki.co.jp>
事業内容 食品製造販売業
創業年 1947(昭和22)年
代表者 吉田 久剛 従業員 260名以上



菅公学生服(株) 仙台営業所

所在地 〒984-0015 仙台市若林区卸町2-7-14
TEL 022-232-5226 FAX 022-232-5227
事業内容 学生服の製造・販売
創業年 1854(安政元)年 代表者 岸柳 正樹
従業員 20名



(株)菊地恵一商店

茶道の豊かさを伝えながら支援につなげたい。
震災を決して風化させないという思い。

米も灯油も分け隔てなく供給。
被災地の子どもたちを何とか支援したい。

米屋を営んでいるため、震災後は米を求めて多数のお客さまが来店されて大変な混雑でした。たまたま在庫は豊富にありましたが、精米が追いつかないので営業時間を限定し、一人当たり5~10kgに制限して販売させていただきました。しかし中には、荒浜で被災し親戚家族の分も欲しいという方が何人かいらしたので、見るに見かねて特別にお分けしたこともあります。灯油の方は何とかご迷惑をかけずに供給することができたと思います。こうして震災から1~2カ月が過ぎるころには、食糧やガソリンが不足している事態は収束していきましたが、被災地の惨状に心を傷める日々が続きました。

私たち連坊商興会では震災前に、ネパールで不当な労働を余儀なくされている未就学児童のためのチャリティーイベントを行っていました。そのチャリティーイベントを、2011年は被災地の震災遺児のために開催しようという話が持ち上がったのです。

私は連坊商興会の企画担当者として、懇意にしていた江戸千家不白会仙台支部(伊藤宗圭社中)の全面的な支援と町内の和菓子店(モ

リヤ)の協力をいただきながら、会場の設営や広報に奔走し“チャリティー七夕茶会”を開催する運びとなりました。



▲ボランティアの高校生と伊藤宗圭社中



▲チャリティー七夕茶会チラシ

これからも継続的に行いたい地道な活動。
被災地を観光で訪れるという応援も。

連坊商興会主催の“連坊七夕まつり”当日は、茶会に必要な茶釜、風炉、短冊(掛軸)、なつめ、茶碗など、一切の茶道具が江戸千家不白会仙台支部より提供され、会場整理のために高校生ボランティアも駆けつけてくれました。会場でのお茶席代のほかに募金も集まり、「東日本大震災みやぎ子ども育英基金」に全額寄付しました。この“チャリティー七夕茶会”は好評だったので、毎年8月の恒例イベントとして現在も継続し、寄付金も集めて「東日本大震災みやぎ子ども育英基金」に寄付しています。

2013年には、連坊商興会レクリエーションとして“石巻・女川 感動の旅”を開催しました。入浴施設や食事処、市場、おみやげ店などを巡る日帰り観光ツアーで被災観光地に少しでも賑わいを取り戻せるように応援するとともに、被災地を見て震災を風化させないよう気を引き締めることができました。商店街の一店舗として、町の

賑わいが大切なことを身をもって知っているからです。

さらに仙台商工会議所の協力を得て、連坊商興会と隣のむにゃむにゃ通り商店街商興会、荒町商店街振興組合の3地区合同で、9月20日~28日までの一週間と、29日に、連坊小路小学校を会場に“復興(復幸)元気市”を開催するなど、支援活動をしようとする意識を持ち続けることが大切だと考えています。

(代表取締役 千葉 隆夫さん談)

支援連携先

- むにゃむにゃ通り商店街商興会
若林区連坊通り(むにゃむにゃ通り)にある商店の商興会
- 荒町商店街振興組合
若林区荒町地区にある商店の振興組合



(株)菊地恵一商店

所在地 〒984-0052 仙台市若林区連坊2-9-37
TEL 022-291-0111 FAX 022-372-0174
E-mail tori09010646364@i.softbank.jp
事業内容 米穀、燃料、日用品販売 創業年 1951(昭和26)年
代表者 千葉 隆夫 従業員 3名



▲代表取締役の千葉隆夫さん

KISEIグループ

美しくありたいという願いに応えたい。
ボランティア活動で得た美容という仕事の価値。

冬に水で洗髪するつらさを何とかしてあげたい。
避難所に駆け付けてのボランティアカット。

仙台周辺で営業する13店舗のうち、多賀城店は津波で甚大な被害を受けました。すぐに10名ほどのスタッフによりお客さまの安全を確認し、お帰りいただきました。その後スタッフは、1階の店舗から屋上へ全員避難しましたが、3mの津波で店は壊滅状態。風と雪が吹きつける屋上で、寒さと戦いながら一晩を過ごすことになりました。

全13店が休業する中で、唯一プロパンガスによる給湯設備だった幸町店が、震災4日後にいち早く再開することができました。避難所となった幸町小学校に手書きのポスター2枚を貼って、「シャンプー&ドライできます」とお知らせしたところ、反響が大きく行列ができるほどでした。今まで水で髪を洗っていた多くの方たちに大変喜んでいただき、中には涙を流して喜んでくださった方もいました。その後、ライフラインが整わない中、各エリアの水道やガスが復旧するまでの期間、毎日100人以上の方にご来店いただきました。さらに甚大な被害を受け避難所となっていた気仙沼中学校では、従業員が休日を返上して避難所の方にボランティアでカットをさせていただきました。

移動美容室「きずな号」で仮設住宅を訪問。
強く、美しい東北をもう一度取り戻したい。

ボランティア活動を続ける中で「カットだけでなくカラーやパーマもできたら…」という被災者からの声が多く寄せられました。私たちは何とか移動美容室のようなものができないか、いろいろな方を練ったところ、仙台青葉ロータリークラブを通じて三菱商事の支援プロジェクトに採用されることになったのです。4カ月後の2011年9月に、宮城県庁で移動美容室は「きずな号」と命名されて贈呈を受け、仮設住宅を訪問してパーマやカラーリングのサービスを提供しました。3トントラックが改造され、リフトも付いている「きずな号」は高齢の方や車イスの方にも大変喜ばれました。この移動美容室ボランティアで出会った、東松島市小野駅前仮設住宅のお母さん方が手作りしている人形“おのくん”の販売のお手伝いも続けています。

全国各地の美容業界から多くの支援物資も届き、ハサミやブラシ、ドライヤーなどの美容道具を、津波ですべての道具を流された個人経営の美容室に提供し、営業再開への支援もさせていただきました。



▲代表取締役の守末紀生さんと本部企画管理室の小野梨紗さん



▲ボランティアカットの様子

▲きずな号とスタッフのみなさん



▲移動美容室でパーマなどのサービスを提供



▲被災者手作り人形“おのくん”

困難な状況の中でもやはり「きれいになりたい」という、人間の美への本能的な思いをかなえたお客さまの喜びは社員たちにも伝わり、社会貢献することの素晴らしさが身に染みたようです。支援活動はまだ不十分だったかもしれませんが、しかし、美しさと心の復興という意味において少しでもお役に立てたとすれば、美容業に携わる者として、これ以上の喜びはありません。

(代表取締役 守末 紀生さん談)

支援連携先

- 仙台青葉ロータリークラブ
1992年に創立された人道的奉仕活動等、親善や平和を築くための助力するクラブ
- 被災者手作り人形“おのくん”
宮城県東松島市の「小野駅前応急仮設住宅」の主婦たちがひとつずつ手縫いで作っている人形

KISEIグループ

所在地 〒981-0913 仙台市青葉区昭和町6-6
TEL 022-275-3289 FAX 022-275-4418
E-mail info@kisei.jp URL http://www.kisei.jp
事業内容 美容事業、プライダル事業、学校法人守末学園(美容専門学校)
創業年 1970(昭和45)年 代表者 守末 紀生
従業員 200名

